

広島大学原医研創立三十周年

記念行事を終えて

原医研三十周年事業実行委員会

文部省附置研究所の見直しに伴う統・廃合論が叫ばれはじめて久しい。その実態は、一方的な解体ではなくて、時代のすう勢に合わせて従来培つて来た歴史的資産を上手に時代



講演者（左から杉本広島県医師会長、重松放影研理事長、田中学長、原田医学部長、藏本所長）

の要請に適合させ、そこから新しい研究テーマを設定し、これに基づいて研究を展開させるよう総意を結集して行くことを狙つている。このような出来事は単に大学の研究機関のみならず、民間企業を含めて全ての分野での技術革新と共に求められている。

この時節に当たり、創立三十周年を迎えた当研究所は、平成三年一月一日（土）広島国際会議場において記念講演会と祝賀会を開催し、関係各位の認識を新たにした。この研究所は杉本広島県医師会長の挨拶にみられた如く、昭和二〇年八月の広島、長崎の原爆に伴う多くの人災への対策は無論、中・長期に亘る人体への後障害を学理的に研究するため設立されたものであり、その中には遺伝、加齢、癌、脳血管障害等の今日的研究テーマが既に当時より想定されていたのである。この間三〇年を経て、研究所は一〇の研究部門と資料センター、放射線施設及び照射動物実験施設が新しく設置され、文部省でも中クラスの研究所として今日に至っている。

さて、現在の研究テーマを大別すると、放射線物理、放射線による急性及び晩発障害、遺伝的効果、発癌、血液疾患を含めたヒト癌

の治療法の開発、被爆者の社会・心理学的研究、関連事項の研修制度、原爆資料の保管と整理などが挙げられる。各研究室は独自の研究テーマを設けて種々の研究を遂行すると同時に、他方では本研究所全体で共通の目標を定めて直接・間接に研究協力をを行っている。更に近年はソ連のチェルノブール原子炉事故が発火点となり、原子力のエネルギー利用に伴う核開発の推進と平行して放射線事故対策が急務の研究テーマとして上がってきた。この中には重松放影研理事長の指摘にも示された如く、放射線事故対策から防護を含めた研究と研修機能の整備強化も必要となってきた。その対応の一つとして、資料センター機能の



祝辞を述べる高文部省研究機関課長



祝辞を述べる平岡広島市長

充実と活用も重要事項の一つとなってきた。本研究所は更に内科、外科という二つの臨床研究科を有し、その活動は原田医学部長の示された如く、内科は血液疾患全般に亘る広く深い研究と治療体系を確立し、外科では諸臓器癌の主として免疫・化学療法に重点を置いた研究が成されている。

このように見えてくると、本研究所の機能は田中學長が言及された如く最も基礎的な遺伝子の解析やその疾病との関連の研究から社会医学まで放射線や原子力に関連した生物学全般の問題までを、真正面から扱つて研究を開いている全国でもユニークな研究所であることが認識された。又、研究所の歴史と展望

に関しては藏本所長と鎌田教授から発言があり、所内的には資料センターと放射線生物実験施設の両附属施設の完備、教育・研究・研修の充実を計ること、二十一世紀へ向けての研究体制の整備に向けて若手、中堅研究者の研究テーマや意識の改革を徐々に行っていること、又、十年単位で見ると研究業績の数と質も充実の一途を辿つていることなどが数字で示された。教授会等での議論も活発となり、全体に風通しが良くなつたことも改革の一つとして挙げられた。

一方、学部と異なつて学生を持つていないため若手研究者や院生のリクルートが遅れ気味であり、人事の停滞などが問題点として挙げられた。これらの問題点を解決する方策として、原医研小冊子と年報の特集号が編纂され、記念会出席者は無論、内・外の国公立研究機関に発送され、更に一層の本研究所の認識が得られるよう努力している。

さて、祝賀会は一転して華やかな雰囲気の中で藏本所長開会の挨拶に続いて、文部省学術国際局研究機関課長 高為重氏の祝辞があり、本研究所が被爆者医療の実践的な研究を目指して設立されたこと、しかし今後は新たな学術研究の動向及び社会的要請に的確に対応しつゝ、国際社会の福祉の向上に貢献することが期待され、竹下県知事（代理）及び平岡市長は本研究所の従来の業績を多とし、特に放射能の学理の研究とその医療への応用を希い、原爆被災全体像と動態調査などの事業

への長年の参加に感謝された。この間には、関係機関からの来賓、O B の教官や技官及び現職員を合わせ総勢約二五〇名の出席のもと、鏡割りや原田医学部長のカンツォーネも披露され盛会裡に閉会した。



講演者、祝辞を述べられた来賓による鏡割り